

寺 町 旧 域

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

寺 町 旧 域

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、共同住宅新築工事に伴う寺町旧域の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

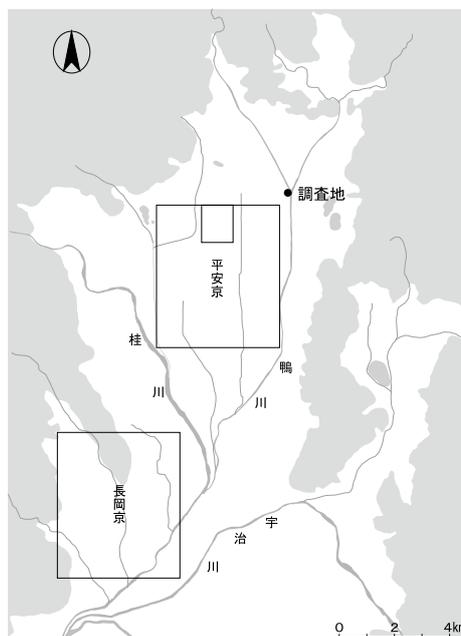
平成25年1月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 寺町旧域（文化財保護課番号 12 S 127） |
| 2 調査所在地 | 京都市上京区榊形通出町西入二神町167、榊形通寺町東入三栄町57 |
| 3 委 託 者 | 有限会社 豆水楼 代表取締役 中居和子 |
| 4 調査期間 | 2012年10月22日～2012年11月22日 |
| 5 調査面積 | 137㎡ |
| 6 調査担当者 | 津々池惣一 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「相国寺」「御所」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 遺物の種類別に通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 津々池惣一 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。 |

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 歴史的環境	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 検出した遺構	5
4. 遺 物	12
(1) 遺物の概要	12
(2) 土器類	12
5. まとめ	16

図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1面全景（北から）
		2	第2面全景（北から）
図版2	遺構	1	柱穴76（西から）
		2	石敷10（北から）
		3	石敷6（東から）
		4	土坑46（西から）

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査前全景（北西から）	2
図3	作業風景（北から）	2
図4	調査区配置図（1：500）	2
図5	周辺遺跡位置図（1：5,000）	4
図6	北壁・東壁断面図（1：100）	6
図7	第1面遺構平面図（1：100）	7

図8	第2面遺構平面図（1：100）	8
図9	個別遺構実測図1（1：50）	9
図10	個別遺構実測図2（1：50）	10
図11	出土土器実測図（1：4）	13
図12	土坑46・77出土土器	14

表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	12
表3	掲載土器一覧表	14

寺町旧域

1. 調査経過

調査対象地は、京都市上京区栴形通出町西入二神町167および栴形通寺町東入三栄町57に所在する。本調査は、この地の共同住宅新築工事に伴う調査である。当地は、周知の遺跡である寺町旧域の範囲に位置していることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導により発掘調査を実施した。調査はL字形の調査区137㎡を設定し、10月22日より開始した。まず、重機により遺構面まで掘削し、その後は人力作業に切り替えて行った。

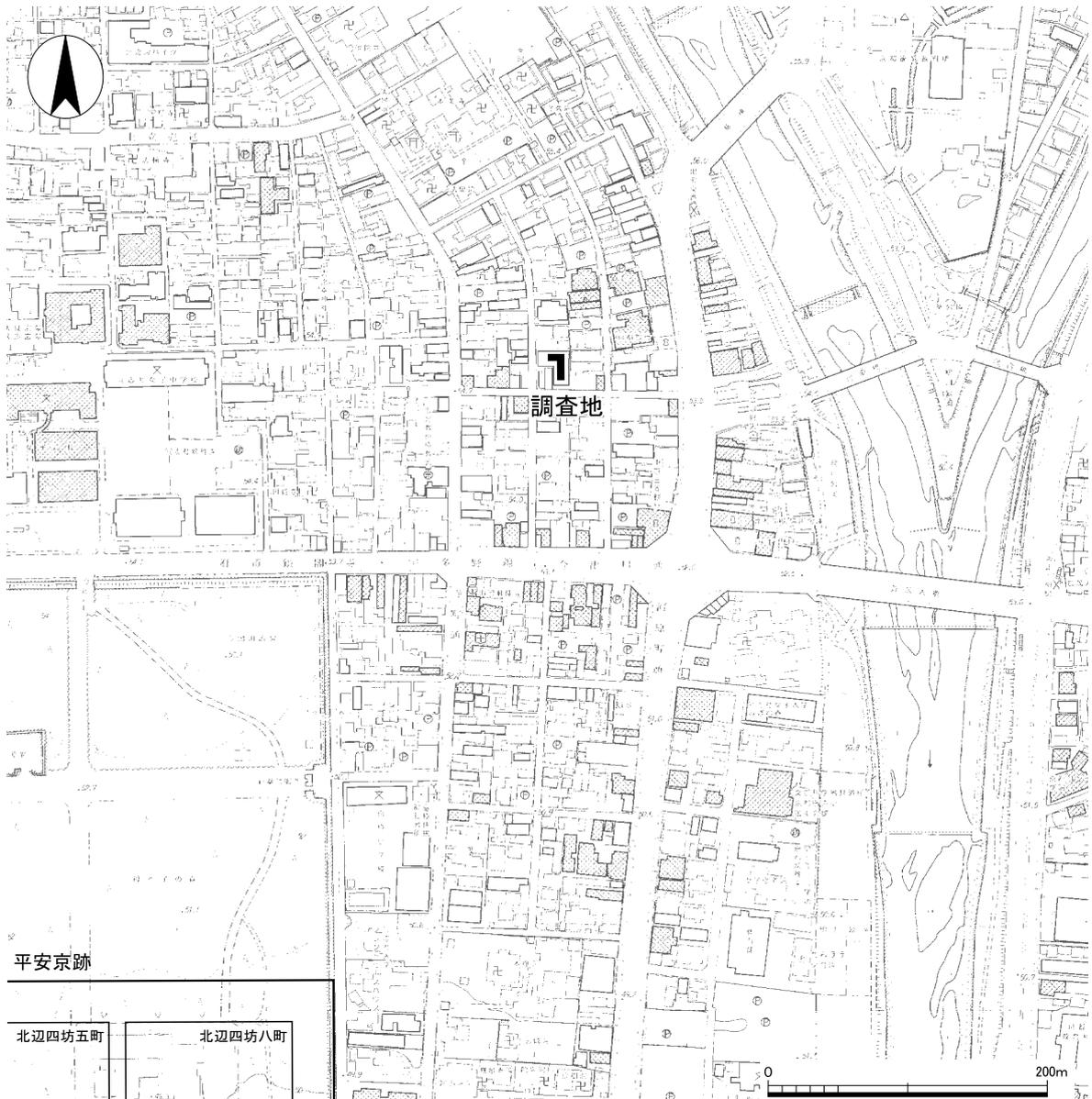


図1 調査位置図（1：5,000）



図2 調査前全景（北西から）



図3 作業風景（北から）

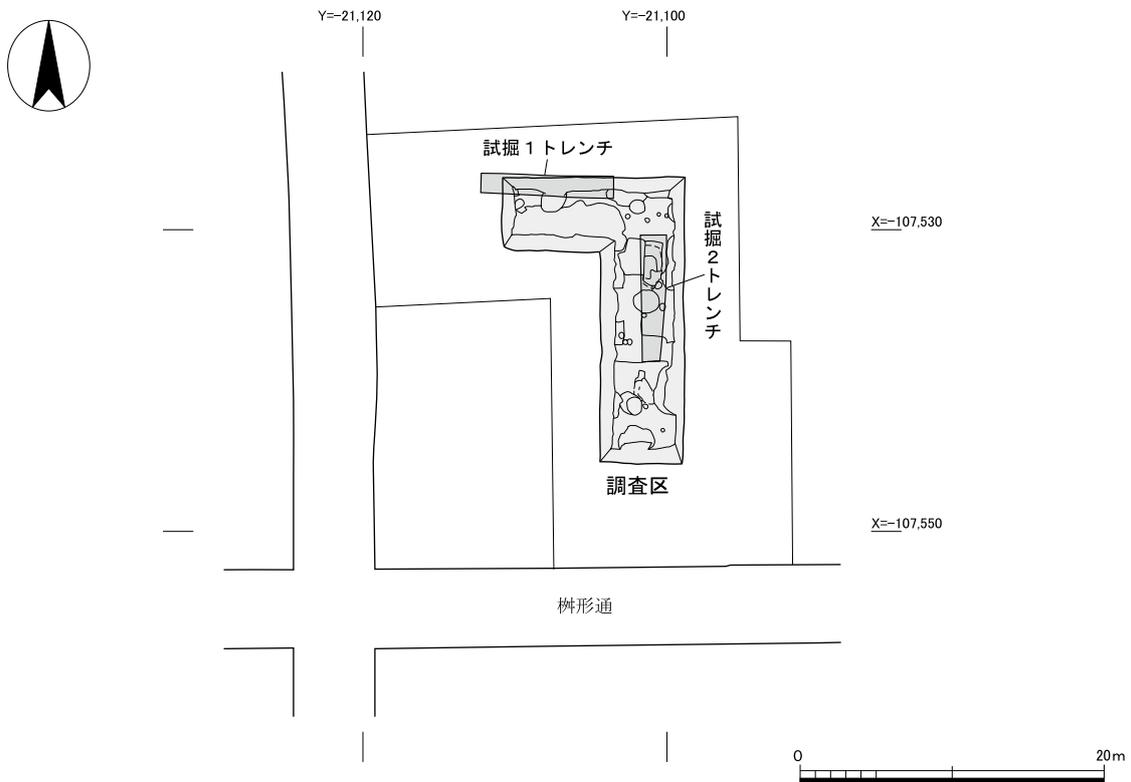


図4 調査区配置図（1：500）

調査では、平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構面を第1面、地山面を第2面とした。各遺構面では全景写真撮影および図面作成などを行い、11月22日に調査を終了した。

なお、調査の進行にあたっては調査開始時および各遺構面検出時に文化財保護課の指導を受けた。

その後の整理作業において、第2面として調査した遺構は、重複関係や出土した遺物から第1面の遺構と同一であると捉えられたので、報告の便宜上、第2面で掲載するが、第1面の遺構と同じ扱いとしている。

2. 歴史的環境

調査地は、鴨川と高野川の合流地点の西側に位置する。調査対象地は寺町旧域として、遺跡範囲に登録されている。当地近辺は平安時代以前は愛宕郡下出雲郷に属しており、調査地東の鴨川対岸には下鴨神社が鎮座するが、土地の利用状況は不明である。わずかに、桓武天皇と関連するといわれる幸神社が伝承を残す。

平安京造営時には、顕著な開発造営は行われなかったようであるが、9世紀から10世紀にかけて左京北辺域に貴族の邸宅などが営まれるようになった。藤原良房の邸宅「染殿」、清和上皇の後院であった「清和院」など、政治的に影響力のある皇族や貴族の邸宅が造営される。当地は京外にあっても、平安京に近接する地域として政治的な重要性がしだいに増してくるようになった。

院政期から鎌倉時代になると、京域の北側近郊地にも開発が及び、調査地西方に平親範が再建した毘沙門堂や川崎観音堂（川崎寺）などの寺社が造営され、また、藤原定家の邸宅を始め貴族の邸宅も建ち並ぶようになる。

室町時代には、この時期この地域を代表する相国寺が足利義満により建立された。調査地の西方にも「相国寺大塔跡」が造営されたとされており、現在も「塔段町」という地名が残る。

豊臣秀吉の時代には御土居が築造され、当地域には土塁の内側に洛中の寺院が移転させられ整然と並べられた。寺町通がこの地域を南北につらぬく形で形成された。文禄年間には調査地付近に立本寺が移築される。以後、江戸時代には御土居跡および鴨河原の開発という形で町地の形成が進められる。

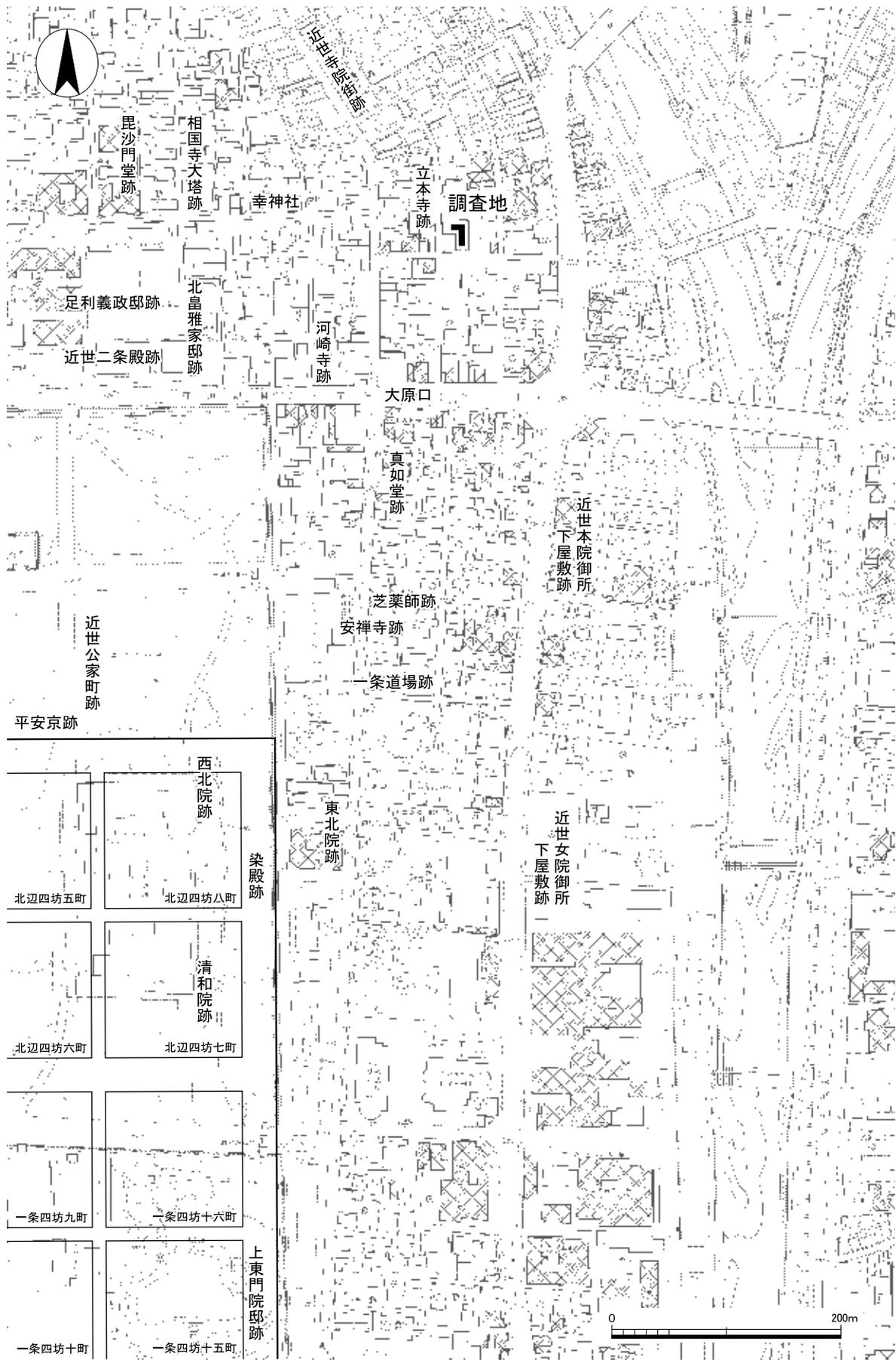


图5 周边遺跡位置图 (1 : 5,000)

3. 遺 構

(1) 基本層序

調査地の地表面下1.0m前後（南側では1.5m前後）までは、建物基礎撤去の際に攪拌されていた。わずかに島状に点在して、地表下0.5～1.0m前後で、近世から室町時代にかけての整地層が残存しているのみであった。地表面から約1.0m以下では、調査区の半分程度の範囲に厚さ0.2～0.5mの平安時代後期の整地層が残存していた。遺構はその整地層を掘り込む形で存在していた。それ以下の1.5m前後（南側では2.0mに及ぶ）より下は地山となっていた。この地山面上でも遺構の存在を確認したが、上層の掘り残しであり、地山面から成立する遺構は存在しない。

(2) 検出した遺構

鎌倉時代から室町時代と思われる規模の大きい柱穴を検出した。また、平安時代後期の遺構には石敷・土坑・柱穴などがある。柱穴は小規模で数少なく建物の復元には至らなかった。

柱穴76（図9、図版2-1） 調査区南端付近で検出した柱穴である。検出面での掘形の規模は長径1.2m、短径0.9m、柱掘形の深さは0.9mある。底部に径0.5～0.6mの扁平な礎盤石を据え、周囲に拳大の根石を詰めている。南北に並びの柱穴は確認できず、東か西側に展開すると思われる。遺物の出土はないが、後述する平安時代後期の石敷遺構を掘り込んでいることから、鎌倉時代から室町時代にかけてのものと思われる。

石敷10（図9、図版2-2） 調査区北寄りで検出した。攪乱で西と南を壊されている。検出した規模は東西0.9m、南北2.0m、深さ0.4mある。石を敷設するにあたって、周囲を掘り窪め、底部に黄褐色系の粘質土を敷き、その上に人頭大の石を敷き詰めている。北東隅は遺構のコーナーと考えられ、石敷は西側と南側にさらに広がるとされる。何らかの構造物の基礎の可能性もある。埋土から京都V期新～VI期に属する土師器などが出土した。

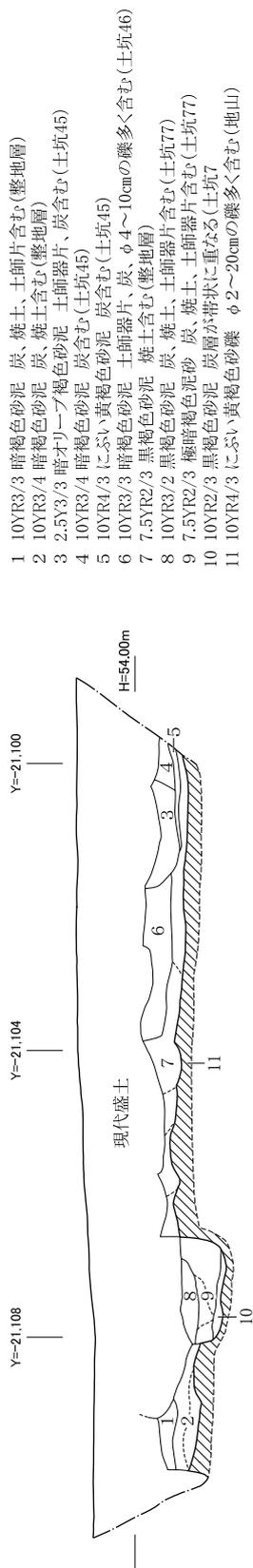
土坑67（図9） 調査区の北寄りで検出した土坑である。石敷10の下で検出した。規模は東西1.2m以上、南北2.9m、深さ0.45mある。検出した平面形は南北に長い楕円形である。南半部が一段深くなっている。西側は攪乱されている。石敷10下の窪地を埋めた整地の可能性もある。

土坑72（図9） 北東部が土坑67の下にあたる。規模は東西1.6m、南北1.6m以上、深さ0.1mある。検出した平面形は不定形である。北側は試掘で攪乱されており、南東側は近世の井戸に壊さ

表1 遺構概要表

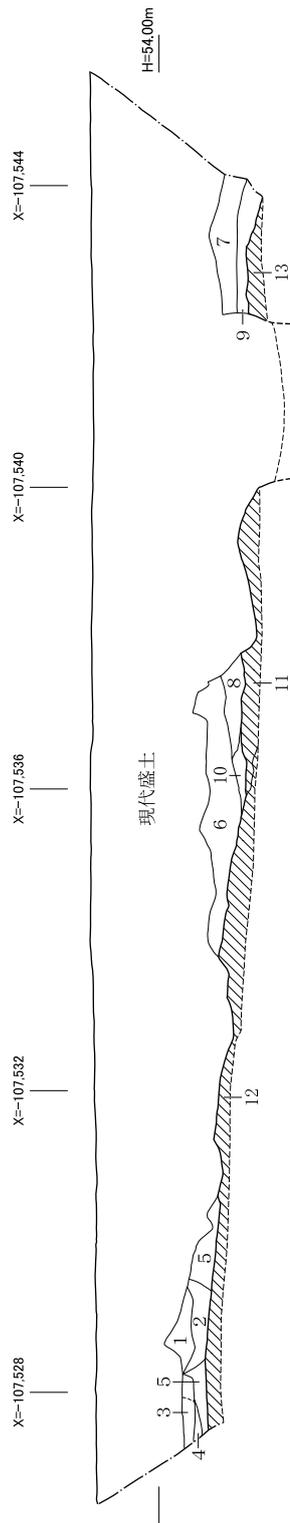
時 代	遺 構	備 考
平安時代	石敷6・10、土坑43・45・46・67・72・77	
鎌倉時代 ～室町時代	柱穴76	

北壁



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭、焼土、土師片含む(整地層)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭、焼土含む(整地層)
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 土師器片、炭含む(土坑45)
- 4 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭含む(土坑45)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭含む(土坑45)
- 6 10YR3/3 暗褐色砂泥 土師器片、炭、φ4~10cmの礫多く含む(土坑46)
- 7 7.5YR2/3 黒褐色砂泥 焼土含む(整地層)
- 8 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭、焼土、土師器片含む(土坑77)
- 9 7.5YR2/3 極暗褐色砂泥 炭、焼土、土師器片含む(土坑77)
- 10 10YR2/3 黒褐色砂泥 炭層が帯状に重なる(土坑7)
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 φ2~20cmの礫多く含む(地山)

東壁



- 9 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂 φ3cmの礫含む
- 10 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
- 11 10YR4/4 褐色砂礫 φ1~20cmの礫多く混入(地山)
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 φ2~20cmの礫多く含む(地山)
- 13 10YR4/4 褐色砂礫 φ4~20cmの礫多く含む(地山)

- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥(土坑43)
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥(土坑43)
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭含む(土坑45)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭含む(土坑45)
- 5 7.5YR2/3 黒褐色砂泥 焼土含む(整地層)
- 6 10YR4/4 褐色砂泥 炭、焼土混入(整地層)
- 7 10YR4/4 褐色砂泥 炭、焼土混入 粘質土含む(整地層)
- 8 10YR4/4 褐色砂泥 炭混入、粘質土含む(7層と同じか)

図6 北壁・東壁断面図 (1:100)

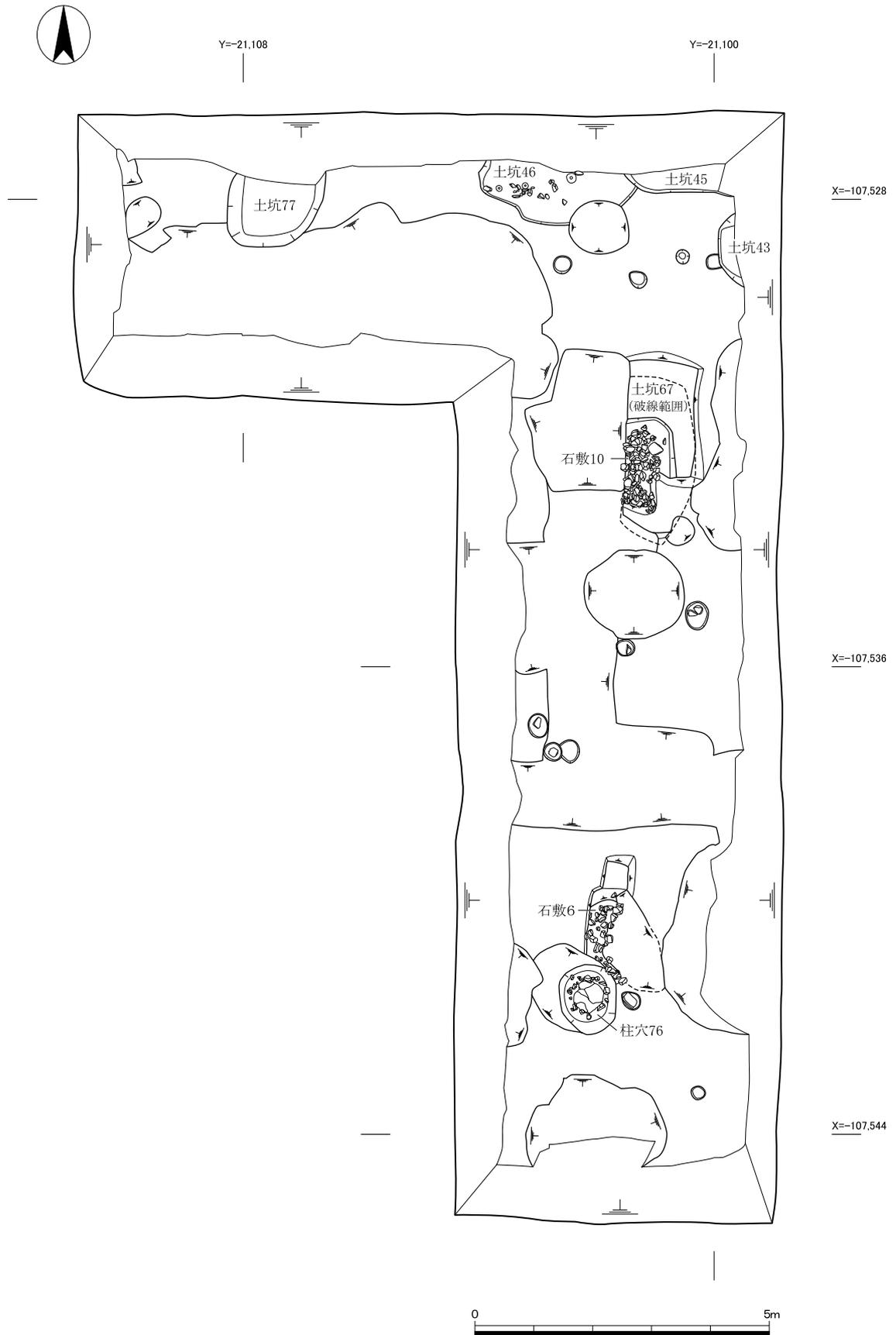


图7 第1面遺構平面図 (1 : 100)

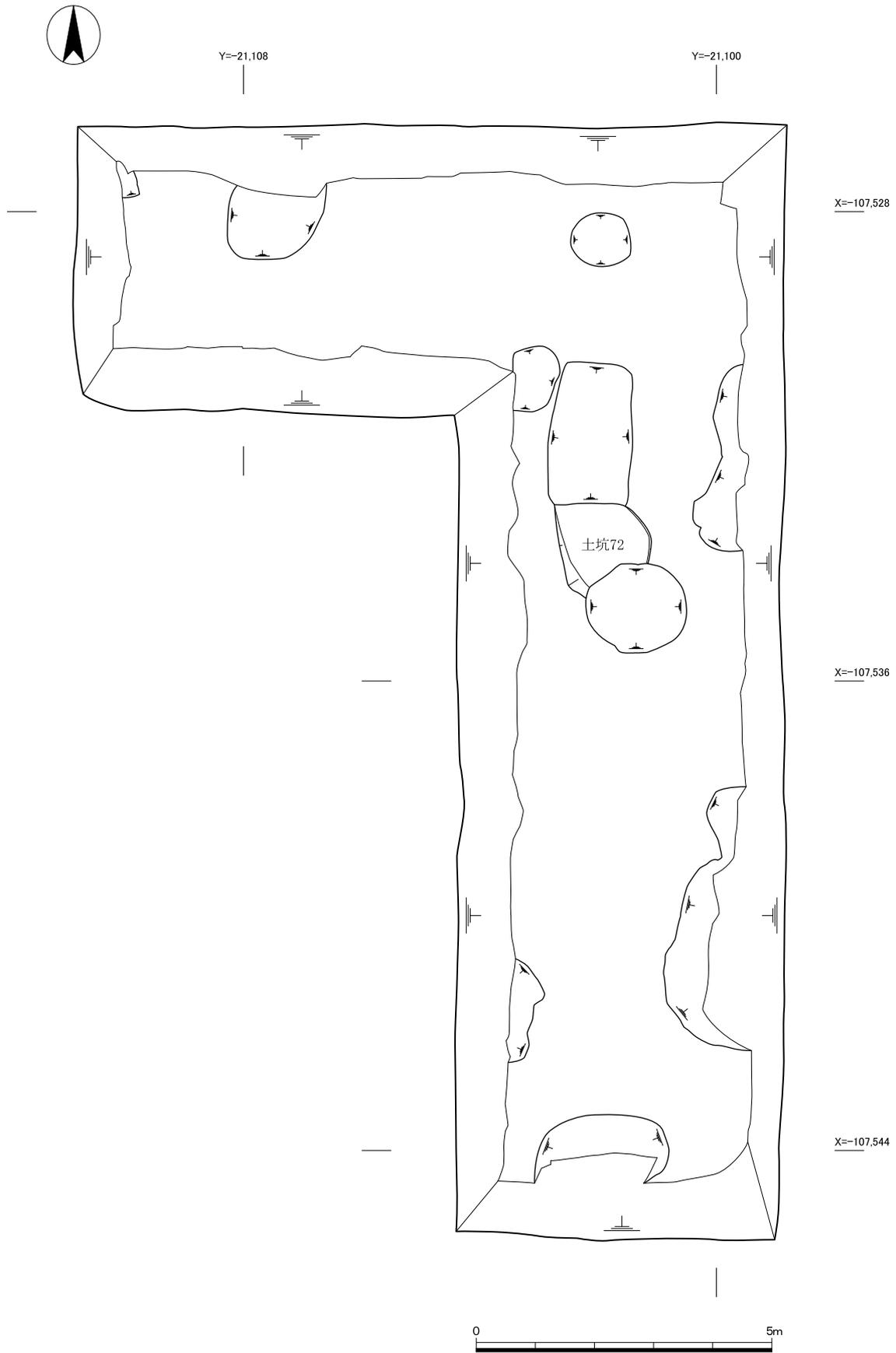
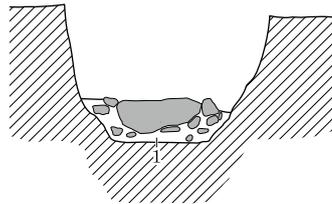
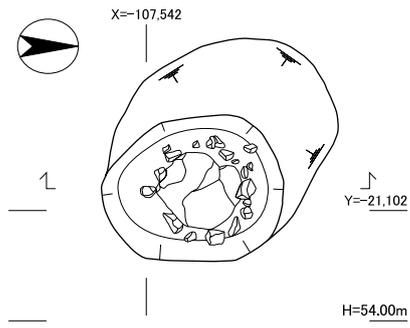


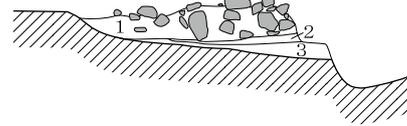
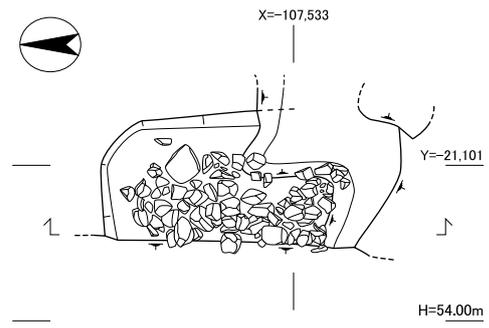
图8 第2面遺構平面図 (1 : 100)

柱穴76



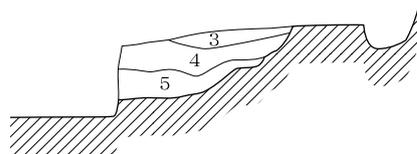
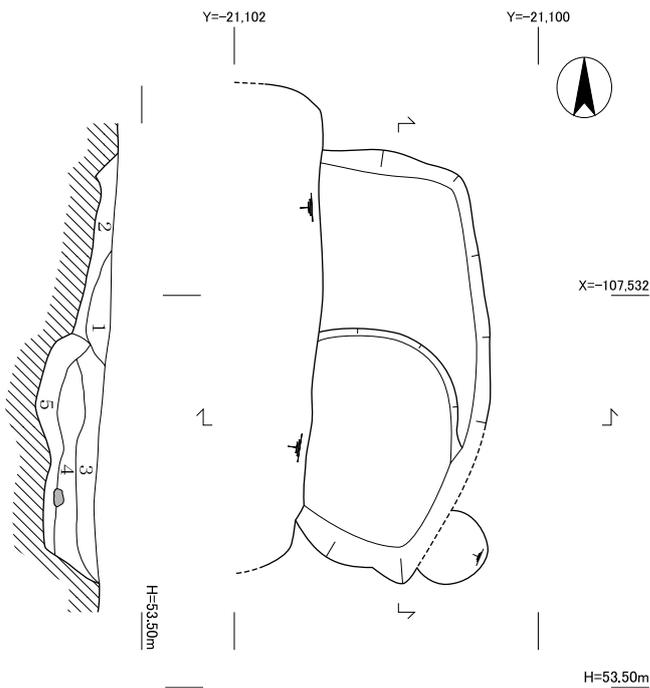
1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土

石敷10



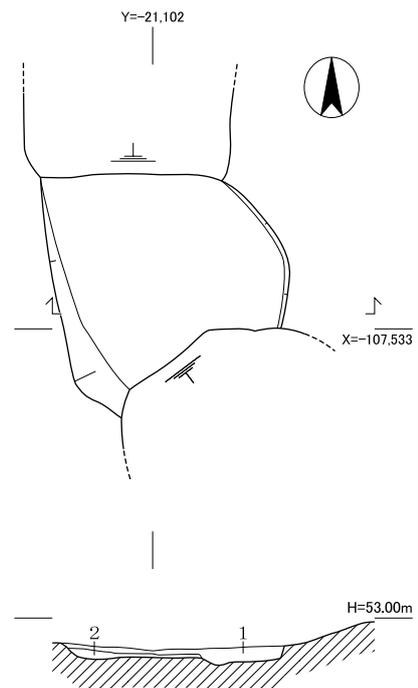
- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥+10YR4/3 黄褐色砂泥
炭、土師器片少量含む
- 2 10YR5/6 黄褐色粘土 炭少量含む
- 3 10YR3/2 黒褐色砂泥

土坑67



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭、焼土含む
- 2 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭、焼土含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥(やや粘質)
- 4 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ0.3~10cmの礫少量含む
- 5 10YR3/3 暗褐色砂泥

土坑72

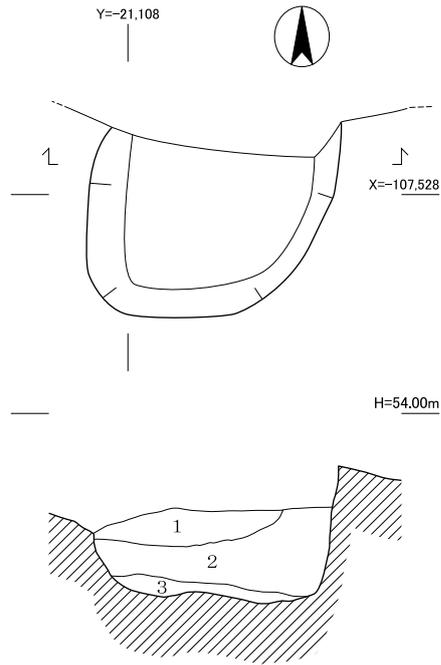


- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥
炭多量、土師器片、粘質土含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥



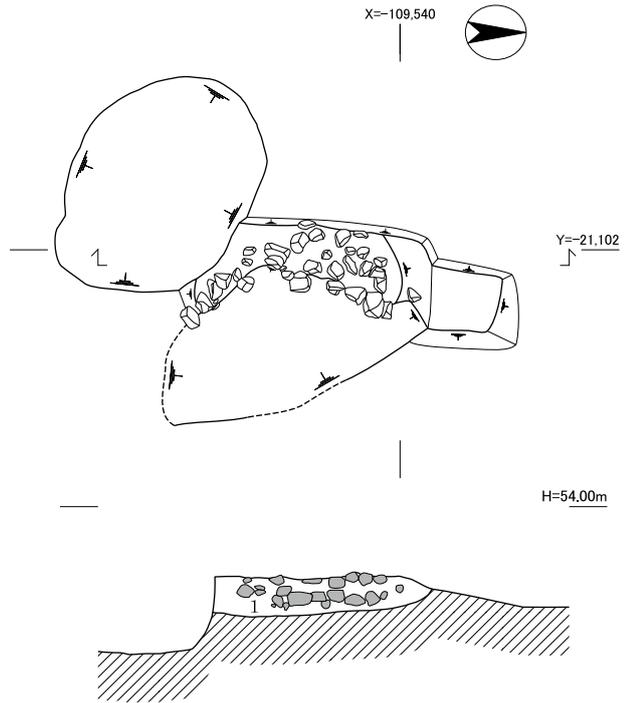
図9 個別遺構実測図1 (1:50)

土坑77



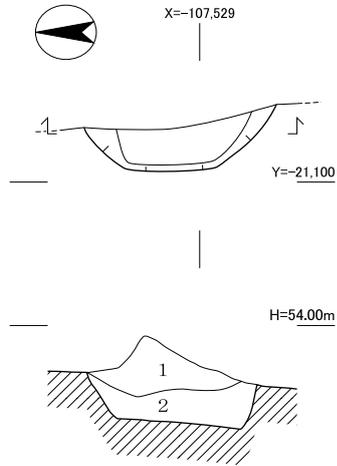
- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭、焼土、土師器片含む
- 2 7.5YR2/3 極暗褐色泥砂 炭、焼土、土師器片含む
- 3 10YR2/3 黒褐色砂泥 炭層が帯状に重なる

石敷6



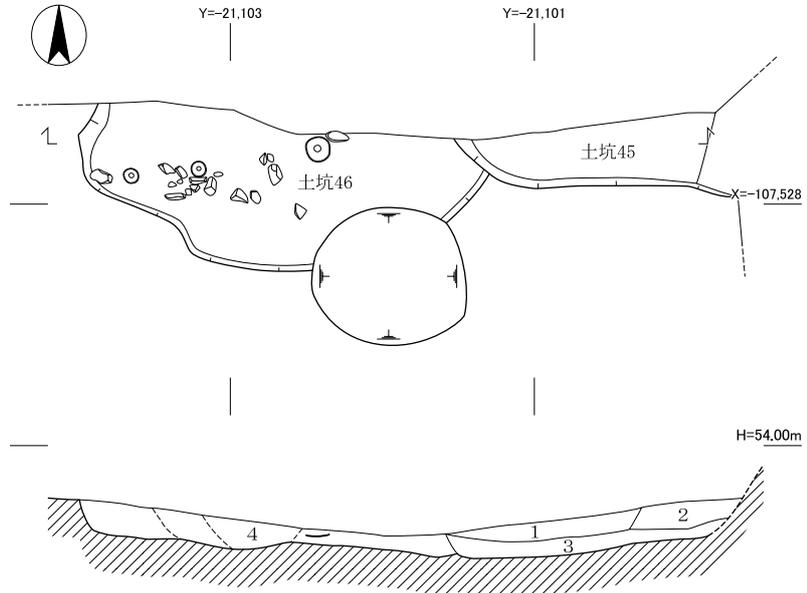
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥+10YR5/2 灰黄褐色粗砂 φ20cm前後の礫多量含む

土坑43



- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥

土坑45・46



- 1 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色砂泥 土師器片、炭含む(土坑45)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭含む(土坑45)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭含む(土坑45)
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥 土師器片、炭、φ4~10cmの礫多く含む(土坑46)

図10 個別遺構実測図2 (1:50)

れている。炭混じりの埋土が薄く均一に堆積している。埋土から京都V期新に属する土師器が出土している。第2面で検出した土坑であるが、遺構の重複関係や出土遺物から第1面で成立していると考えられる。

土坑77(図10) 調査区北西部で検出した土坑である。規模は東西1.6m、南北1.2m以上、深さ0.6mある。検出した平面形は半円に近い。北側は調査区外に延びる。埋土の下層には、炭と灰混じりの層が薄く堆積している。埋土から京都V期新に属する土師器などが出土した。

石敷6(図10、図版2-3) 調査区南側で検出した。攪乱で東と南を壊されているが、検出した規模は南北1.6m以上、東西0.7m以上、深さ0.3mある。石の敷設に際して周囲を掘り窪め、その上に人頭大の石を敷いている。石敷10とは異なり石は密ではなく、粘質土層も見られない。埋土から京都V期新に属する土師器が出土した。

土坑45(図10) 調査区北東隅で検出した土坑である。規模は東西1.7m以上、南北0.5m以上、深さは0.2mある。調査区外の北側と東側に延びる。

土坑46(図10、図版2-4) 土坑45の西側に隣接して検出した。規模は東西2.7m、南北1.0m以上、深さ0.2mある。検出した平面形は不定形である。調査区外の北側に延びる。土器片や拳大の礫が含まれる。土坑45に壊されている。埋土から京都V期古に属する土師器が出土した。

土坑43(図10) 調査区北東隅付近で検出した。規模は東西0.3m以上、南北1.3m以上、深さ0.5mある。検出した平面形は半円状である。埋土の下層部分はよく締まる。調査区外の東側に延びる。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱に26箱出土した。平安時代から近世・近代までの遺物が出土した。ほとんどが土器類である。平安時代後期の土器類が中心で、瓦類の出土量は小破片で少ない。平安時代前期・中期の土器も小破片が出土しているが、平安時代後期の遺構への混入である。鎌倉時代から室町時代の土器は攪乱土坑などから、土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器などが極少量出土しているが、小破片のため図示できなかった。江戸時代以降の遺物は後期から幕末・明治のものでほぼ占められ、土坑や井戸から土師器・焼締陶器・施釉陶器・国産磁器・瓦類などが出土している。以下に、遺構別一括で出土した平安時代後期の土器群について概略を述べる。なお、土器年代は京都の土器編年に準拠した¹⁾。

(2) 土器類 (図11・12、表3)

整地層出土土器 (1～7) 1は須恵器壺である。底径7.4cm、器高9.9cm以上である。胴部の外面は回転ナデを施す。底部は糸切りしている。肩部には自然釉が付着する。東海系の製品である。土師器皿N (2～6) は小型と大型がある。小型皿 (2～4) は口径8.7～9.0cm、器高1.5～1.9cmの範囲に収まる。いずれも口縁部は内湾気味で二段ナデを施す。大型皿 (5) は口径14.6cm、器高3.8cmで、やや内湾する口縁部は二段ナデを施す。大型皿 (6) は口径15.0cmで、口縁端部は立ち上がり、やや内湾する。口縁部は二段ナデを施す。7は白磁の椀底部である。底径5.4cm、器高1.9cm以上で、内面に施釉する。櫛描文を施し、外面は露胎である。須恵器壺はやや古い様相を示すが、土器群としては京都V期古に属する。

土坑46出土土器 (8～20) 土師器皿Nのみである。小型皿と大型皿がある。8～14は小型皿で、口径8.2～9.4cm、器高1.4cm前後である。内湾する口縁部で二段ナデを施す。15～20は大型皿で、口径13.6～14.8cm、器高2.2～2.9cmである。内湾する口縁部で二段ナデを施す。京都V期古に

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器、瓦	21箱	土師器34点、須恵器2点、瓦器1点、白磁1点	0箱	20箱
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦質土器、瓦	1箱		0箱	1箱
江戸時代	土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器、瓦質土器、瓦	5箱		0箱	5箱
合 計		27箱	38点 (1箱)	0箱	26箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

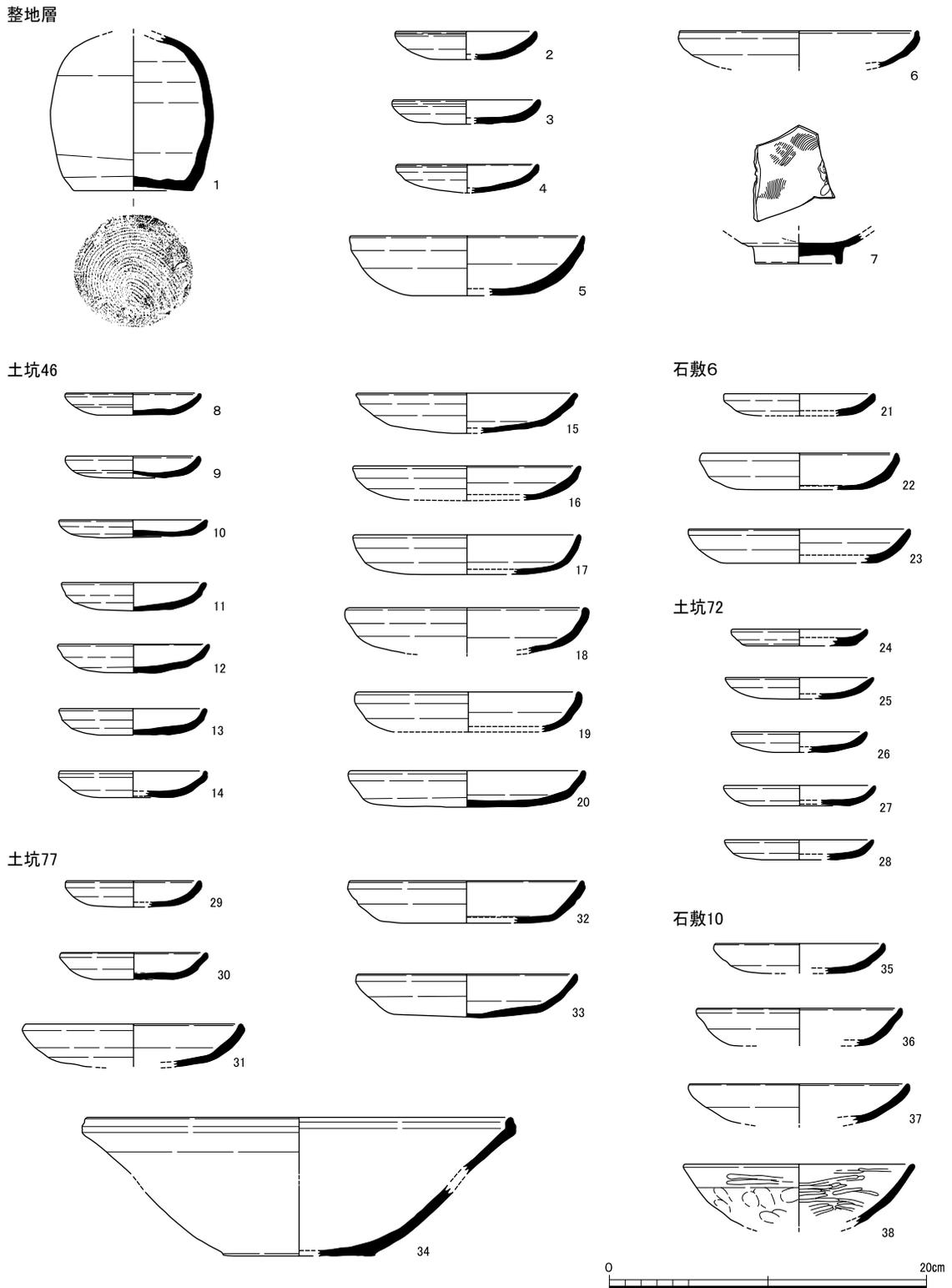


図11 出土土器実測図（1：4）

属すが、ナデ調整などに新しい様相が見られる。

石敷6出土土器（21～23） 土師器皿Nの小型と中型のものである。小型皿（21）は口径10.4cm、器高1.4cmで、内弯気味の口縁部は一段ナデを施す。中型皿（22）は口径12.2cm、器高2.3cmで、口縁部は内弯し一段ナデを施す。中型皿（23）は口径13.3cm、器高2.2cmで、内弯する口縁部は一

表3 掲載土器一覧表

No.	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	胎土・色調	残存率	備考
1	須恵器	壺	整地層		(9.9)	7.4	2.5Y6/1 黄灰色	40%	東海系
2	土師器	皿	整地層	(8.7)	1.8		2.5YR7/6 橙色	25%	
3	土師器	皿	整地層	(9.0)	1.5		5YR6/6 橙色	33%	
4	土師器	皿	整地層	(8.8)	1.9		7.5YR7/4 にぶい橙色	40%	
5	土師器	皿	整地層	(14.6)	3.8		10YR7/3 にぶい黄橙色	20%	
6	土師器	皿	整地層	(15.0)	(2.1)		10YR7/4 にぶい黄橙色	17%	
7	白磁	椀	整地層			(5.4)	2.5Y8/2 灰白色	33%(底部)	
8	土師器	皿	土坑46	(8.4)	1.4		10YR7/3 にぶい黄橙色	40%	
9	土師器	皿	土坑46	(8.2)	1.4		10YR7/3 にぶい黄橙色	50%	
10	土師器	皿	土坑46	9.2	1.1		7.5YR7/4 にぶい橙色	完存	
11	土師器	皿	土坑46	8.8	1.8		7.5YR8/4 浅黄橙色	25%	
12	土師器	皿	土坑46	9.4	1.8		5YR7/4 にぶい橙色	完存	
13	土師器	皿	土坑46	9.0	1.7		10YR7/3 にぶい黄橙色	25%	
14	土師器	皿	土坑46	9.2	(1.7)		10YR7/3 にぶい黄橙色	40%	
15	土師器	皿	土坑46	(13.6)	2.6		7.5YR7/6 橙色	25%	
16	土師器	皿	土坑46	14.2	(2.2)		10YR7/3 にぶい黄橙色	40%	
17	土師器	皿	土坑46	14.2	(2.5)		7.5YR8/4 浅黄橙色	25%	
18	土師器	皿	土坑46	(14.8)	(2.9)		10YR7/3 にぶい黄橙色	14%	
19	土師器	皿	土坑46	13.8	(2.5)		7.5YR7/4 にぶい橙色	17%	
20	土師器	皿	土坑46	(14.6)	2.3		10YR8/4 浅黄橙色	60%	
21	土師器	皿	石敷6	10.4	(1.4)		7.5RY7/4 にぶい橙色	17%	
22	土師器	皿	石敷6	12.2	(2.3)		2.5Y7/3 浅黄色	17%	
23	土師器	皿	石敷6	13.3)	(2.2)		10YR7/3 にぶい黄橙色	17%	
24	土師器	皿	土坑72	(8.4)	(1.1)		2.5Y7/1 白色	13%	
25	土師器	皿	土坑72	9.2	(1.4)		10YR6/3 にぶい黄橙色	10%	
26	土師器	皿	土坑72	8.6	(1.3)		2.5Y7/3 浅黄色	13%	
27	土師器	皿	土坑72	9.4	(1.3)		7.5YR7/4 にぶい橙色	13%	
28	土師器	皿	土坑72	9.2	(1.3)		10YR7/2 にぶい黄橙色	10%	
29	土師器	皿	土坑77	(8.3)	1.7		10YR7/4 にぶい黄橙色	33%	
30	土師器	皿	土坑77	(9.0)	1.7		10YR7/4 にぶい黄橙色	50%	
31	土師器	皿	土坑77	(13.5)	(2.7)		10YR8/3 浅黄橙色	17%	
32	土師器	皿	土坑77	(14.6)	2.7		10YR6/3 にぶい黄橙色	20%	
33	土師器	皿	土坑77	13.7	2.8		10YR8/3 浅黄橙色	完存	
34	須恵器	鉢	土坑77	26.6	8.8	9.6	N5/0 灰色	25%	東幡系
35	土師器	皿	石敷10	(10.6)	(1.9)		7.5YR7/4 にぶい橙色	17%	
36	土師器	皿	石敷10	(11.6)	(2.4)		10YR7/3 にぶい黄橙色	17%	
37	土師器	皿	石敷10	(13.6)	(2.6)		2.5Y8/1 灰白色	13%	
38	瓦器	椀	石敷10	14.5	(4.0)		N3/0 暗灰色	20%	和泉産

段ナデを施す。京都V期新に属する。

土坑72出土土器(24~28) 土師器小型皿Nのみで、皿(24~28)は口径8.4~9.4cm、器高1.1~1.4cmである。口縁部は内弯し一段ナデを施す。25・27・28は端部を上方につまみ上げる。京都V期新に属する。

土坑77出土土器(29~34) 土師器皿Nと東播系の須恵器鉢がある。土師器皿には小型と大型がある。小型皿(29・30)は口径8.3~9.0cm、器高1.7cmで、口縁部は内弯気味で一段ナデの後、端部を上方につまみ上げる。大型皿(31~33)は口径13.5~14.6cm、器高2.7~2.8cmある。口縁部は内弯し一段ナデを施す。31・32は端部を上方につまみ上げる。須恵器鉢(34)は口径26.6cm、推定器高9cmほどみられる。体部はやや外反し斜め上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げて収める。内外面ともに横ナデを施す。内面には使用痕が見られる。京都V期新に属する。

石敷10出土土器(35~38) 土師器皿Nの小型皿と大型の皿がある。小型皿(35)は口径10.6cm、器高1.9cmで、内弯する口縁部は一段ナデを施す。小型皿(36)は口径11.6cm、器高2.4cmで、口縁部は一段ナデを施す。大型皿(37)は口径13.6cm、器高2.6cmで、口縁部は一段ナデを施す。38は瓦器椀で、口径14.5cm、器高4.0cmある。体部外面はオサエで調整するが、ヘラミガキは見られない。内面は幅広の粗いヘラミガキを施している。口縁端部は丸く収める。和泉型である。京都V期新~VI期古に属する。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年



図12 土坑46・77出土土器

5. まとめ

今回の調査では、全域が地表下1.0～1.5mまで攪拌されていたが、その下層で平安時代後期の整地層とそれに関わる遺構を検出した。以下では、その成果について簡単にまとめたい。

平安時代の前期・中期の遺構は検出できなかったが、遺物は散見するので、その頃から開発は始まるようである。付近一帯では、桓武天皇に関わりがあるとされる「幸神社」が調査地西側に推定されており、9世紀から10世紀にかけて左京北辺に造営された藤原良房の邸宅「染殿」、清和上皇の後院「清和院」との関係も、今後の検討課題となろう。

平安時代後期の整地層と、それに関わる遺構を検出したことにより、この時期に大規模な開発がなされたことが窺える。付近では、院政期頃から、調査地の南西方向に「川崎観音堂」、西に「毘沙門堂」などの寺社が建立されている。今後、これらに関連する遺構の発見が期待される。

鎌倉時代から室町時代にかけても、礎盤石をもつ柱穴を検出しており、寺院や社の存在が想定される。西方には、相国寺「大塔跡」などの遺跡が存在したとされているが不明な点が多い。今後、中世における相国寺の東側が、どのような景観となっていたのか明らかにしていく必要がある。

図 版



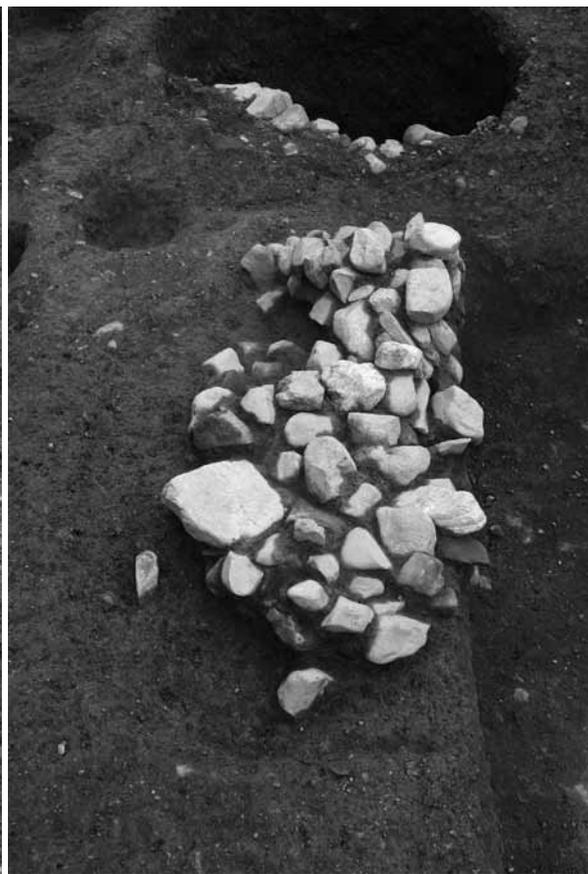
1 第1面全景（北から）



2 第2面全景（北から）



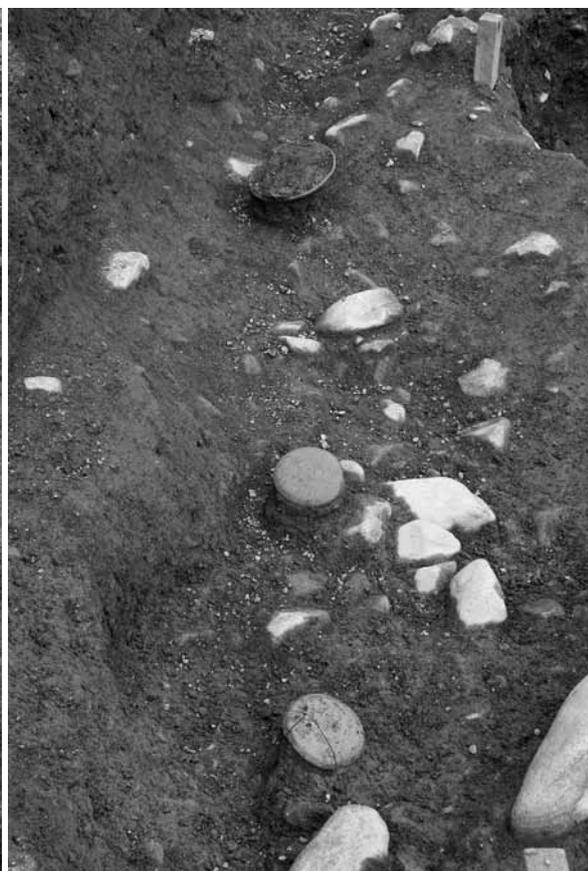
1 柱穴76 (西から)



2 石敷10 (北から)



3 石敷6 (東から)



4 土坑46 (西から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	てらまちきゅういき							
書名	寺町旧域							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-12							
編著者名	津々池惣一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てらまちきゅういき 寺町旧域	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 ますがたどおりでまちにし 栢形通出町西 いるにじんちょう 入二神町167 ますがたどおりてらまちひがし 栢形通寺町東 いるさんえいちょう 入三栄町57	26100	170	35度 01分 50秒	135度 46分 07秒	2012年10月 22日～2012 年11月22日	137㎡	共同住宅 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
寺町旧域	寺院跡	平安時代	石敷、土坑		土師器、須恵器		平安時代の整地層 および石敷と土坑 を検出した。	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-12

寺 町 旧 域

発行日 2013年1月31日

編 集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発 行

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961